



大阪大学会館（旧イ号館）2019年6月8日、山崎正和名誉教授文化勲章受章記念フォーラムの様子

目次

研究科長 あいさつ.....P2	研究室単位同窓会(哲学・思想文化学、文芸学).....P5
新同窓会副会長 あいさつ.....P2	退職される先生方からのメッセージ.....P6~7
【特集】	事務局便り.....P8
山崎正和名誉教授 文化勲章受章記念フォーラム及び祝賀会.....P3	第10回 同窓会講座のご報告.....P8
同窓生からのメッセージ.....P4	第11回 同窓会講座のご案内.....P8
「教育ゆめ基金」のご報告.....P5	

百舌鳥・古市古墳群と大阪大学

福永 伸哉

二〇一九年七月、アゼルバイジャンで開催されたユネスコの第四三回世界遺産委員会、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録が決まりました。考古学の立場で、登録のお手伝いをさせていただいて九年。ともかくここまでこぎ着けられたことに安堵しています。

地元（大阪府・堺市・羽曳野市・藤井寺市）と文化庁、それに宮内庁が協力して作成した推薦書は七五〇頁の大作。これをまとめ上げるには、いろんな苦労がありました。長さ五百mの大仙陵古墳（宮内庁治定・仁徳天皇陵）を筆頭に、二百m以上の古墳を一一基も含むその世界的な「巨大性」には、文句のつけようがありません。しかし肝心の歴史記述になると、考古学の成果と陵墓を管理する宮内庁の「立場」は、大きく違うのです。

たとえば、百舌鳥・古市古墳群の三大前方後円墳の造られた順序は、考古学では、①上石津ミサンザイ古墳（履中天皇陵）②登田御廟山古墳（応神天皇陵）③大仙陵古墳（仁徳天皇陵）で確定ですが、宮内庁がその被葬者と主張する天皇の歴代順は②③①となり、合いません。また、考古学的には古墳群の最終段階の築造で間違いのない岡ミサンザイ古墳は、宮内庁の治定では、応神天皇よりさらに古い仲哀天皇の陵となります。

陵墓の治定は考古学が発達の幕末・明治初年に行われたものですから、研究の進展によってそれが訂正されることはむしろ当然です。しかし、今回の推薦書は、学術成果と宮内庁の「立場」のギリギリの妥協点を探ったものでした。そうしてでも、地元と宮内庁が連携して古墳群の恒久的な保存管理体制を初めて作ったことに意義があります。そして、わが文学研究科にはこの古墳群の最も充実した資料群である藤井寺市野中古墳の出土品（重要文化財）が所蔵されています。一九六〇年代に国史研究室の発掘調査で出土したものです。百舌鳥・古市古墳群は、永く後世に伝えることが約束されました。千年後の未来大阪に存在する古墳群と、千年の歴史を刻んで発展した大阪大学の立派な博物館に展示された野中古墳の出土品。そんなシーンを夢見ることさえ許されるような気がします。



略歴
1959年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）。文学研究科助教授を経て、2005年から同教授。日本学術会議会員。専門は日本考古学・比較考古学で、弥生・古墳時代の研究が中心。著書に『邪馬台国から大和政権へ』、『三角縁神獣鏡の研究』、『Burial Mounds in Europe and Japan』（編者）など。

「同窓会副会長 あいさつ」

玉井 暉

阪大を定年退職してもう十年になる。六三歳の定年制が敷かれていた最後の年度であった。今振り返ってみると、少し早い目の退職と映ったのであろうか。武庫川女子大から話があって転出することができた。私学の、しかも女子大の専任としては初めての勤務であったので、研究・教育から大学の管理運営まで、いろんな面で戸惑うことが多々あり、一種のカルチャー・ショックを味わったものの、阪大でのかつての経験を活かし、それなりに楽しく過ごすことができたが、そろそろ第二の定年も近づいた。まだいくらか元気なうちに、長くお世話になった母校の同窓会のために微力を尽くすのもひとつのめくり合わせかなと思いい大役を引き受けました次第である。



略歴
1946年生まれ。阪大文学部英文学専攻を卒業。同大学院修士課程修了。博士（文学）。阪大文学部助手、和歌山大学助教授を経て、阪大文学部に助教授として着任。その後教授。阪大名誉教授。その間、武庫川女子大学文学部在長。専門はイギリス近世文学、ウィクトリア朝小説、批評理論。

副会長就任のご挨拶

村田 路人

かつて四年間事務局長を務めた経験があるからでしょうか、思いがけず、昨年四月より副会長の重責を担うことになってしまいました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

わが同窓会も、それなりの活動をしてきましたが、残念なことに、それが卒業生や現役学生にあまり知られていないといえませんが、同窓会の存在と活動内容を広く浸透させていくことが肝要と感じています。卒業生の心よりどころになるような同窓会になればと思っています。



略歴
1955年生まれ。大阪大学文学部卒。同大学院文学研究科博士後期課程中退。大阪大学助手、京都橘女子大学専任講師、同助教授を経て1996年大阪大学文学部助教授。2002年教授。著書に『近世広域支配の研究』（大阪大学出版会、1995年）、『近世畿内近国支配論』（塙書房、2019年）など。

同窓会会員へのメッセージ。

服部 典之

一九八一年阪大文学部卒です。母校で英文学を教えています。この文章を書くために、阪大文学部同窓会のウェブページでニュースレターを読み返してみました。同窓会事務局が組織として整備されたのが二〇〇三年で、その年ニュースレターの一号が発行され、その時の総務が私でした。それ以来二〇一〇年まで、総務と広報を担当していたからです。ずいぶんたくさんの仕事を同窓会で務めてき疲れたためか、その後しばらく同窓会から離れていました。「いや、これではいけない」と思い、舟場事務局長の励ましもあり、幹事会に再び出席しはじめ、この度の副会長就任という運びになりました。ニュースレター四号（二〇〇六年）には英文科研究室紹介の記事を載せていますが、この時点で私は阪大文学部に入學してから三〇年経ったと書いています。さらにそれから今年で一年が経ったわけで、時が過ぎ去る早さは恐ろしいものです。過去ばかり振り返ってしまいました。これからの同窓会の発展のために、微力ながら尽くしたいと思う所存です。



略歴
1958年生まれ。1981年阪大文学部卒業。阪大院を中退、和歌山大学教育学部、阪大言文での勤務を経て、2000年より阪大文学部英文科に配置換え。著書に『詐術としてのフィクション—デフォーとスモレット』（2008）、『ガリヴァー旅行記徹底注釈』（2013）など。翻訳にウェイン・ブースの『小説の修辭学』（1991）、ゲオルゲ・フォルスター『世界周航記』（上・下）（2006、2007）など。

副会長あいさつ

澤田 有紀

副会長のご指名を受け光栄に存じます。卒業後は一般企業に就職し、結婚してから司法試験に挑戦し、現在は大阪で弁士業をしております。アカデミックな環境とは程遠く、同窓会ともご縁がなかったのですが、一昨年、恩師河上誓作先生から同窓会の幹事にお声がけをいただき、同窓会とのご縁をいただきました。

卒業生の皆様に、母校とのつながりを感じていただけるような発信ができればと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。



略歴
1963年生まれ。1985年阪大文学部英語学専攻を卒業。2000年4月 弁士登録（大阪弁士会）
2012年9月 みお総合法律事務所を設立し、代表弁士となる。
2020年度 大阪弁士会副会長。日弁連理事。

特集

山崎正和名誉教授文化勲章受章
記念フォーラム及び祝賀会

永田 靖

文学研究科美学科芸能史・演劇学講座（当時）で長らくご研究と後進の育成に尽力された山崎正和大阪大学名誉教授が、平成三十年度の文化勲章を受章されました。文学研究科ではそのお祝いとこれまでの先生のご業績を顕彰するために、令和元年六月八日に大阪大学会館において、受章記念フォーラムと祝賀会を開催しました。

当日は、中尾薫演劇学研究室准教授の司会により、冒頭福永伸哉文学研究科長のご挨拶の後、山崎正和先生に「社交と思想」と題してお話しを頂きました。山崎先生は、学問には最終的な「真実」は存在せず、常に反駁が可能であるとポパーやクーンを例示されながら説明された上で、その反駁が行われる学問的な共同体のあり方について話されました。そこでは実践的組織的なあり方と、遊戯的社交的なあり方の二通りがあり、大学はこの両面を併せ持つが、とりわけ研究室は後者のあり方が重要なのではないかと示唆されました。これを受けて、鷺田清一大阪大学名誉教授と天野文雄大阪大学名誉教授のお二人にご講演を頂きました。鷺田清一先生は「双葉の思考」と題されたお話しの中で、山崎先生のお仕事には相反する感情や考え方が共存しており、その両義性を支えるのがリズムと受動性であるとされ、それらが山崎先生のお仕事には通底しているとお話しされました。続いて天野文雄大阪大学名誉教授には「能楽研究からみた山崎戯曲『世阿弥』のことなど」と題されたお話しを頂きました。天野文雄先生は、主として山崎先生の戯曲『世阿弥』について、能楽研究からみた世阿弥の作品の構造と戯曲『世阿弥』の共鳴関係を示されながら、この作品の人物造型の点には、決定することのない両義的な側面が見て取れることをお話しされました。期せずして哲学と演劇研究の両面から、山崎先生のお仕事に共通して見られる方向性を指摘頂くこととなり、山崎先生のこれまでのお仕事を深く理解することができました。その後休憩を挟んでの第二部「鼎談」では、山崎先生を囲んで鷺田先生、

天野先生に山崎先生の人となりや大学時代の思い出などを打ち解けた雰囲気でお話し頂き、和やかに記念フォーラムを閉じることができました。

記念フォーラム閉会後には、同会館のアセンブリーホールにて、林公子近畿大学教授の司会により、記念祝賀会を開催いたしました。川合康文学研究科副研究科長の開会ご挨拶の後に、西尾章治郎大阪大学総長にご挨拶を頂き、山崎先生のこれまでの活躍と文化勲章受章についてのお祝いの言葉を頂戴しました。その後、旧美学科で長らく同僚としてお勤めになられた上倉庸敬大阪大学名誉教授に乾杯のご挨拶を頂きました。その後は、山崎先生がその設立に最初から関わられた兵庫県立芸術文化センターの藤村順一副館長、また文学部・文学研究科同窓会長の柏木隆雄大阪大学名誉教授、そして大阪大学演劇学研究室での山崎先生の教え子で劇作家堤春江さんに、それぞれご祝辞を頂きました。また同じく同研究室で学位を取られた王冬蘭帝塚山大学元教授による、中国北京の中央戯劇学院での『世阿弥』公演についてのお話しと映像紹介、そして演劇学研究室在校生たちによる山崎先生の初期の戯曲『凍蝶』のリーディング公演などを行い、山崎先生の演劇と演劇研究のお仕事の一端をご披露して花を添えました。そして最後には、演劇学研究室を山崎先生とともに長らく運営されました天野先生から花束を贈呈して頂き、祝賀会を閉じることとなりました。（また閉会のご挨拶を渋谷勝己文学研究科副研究科長にお願いをしておりましたが、段取りの手違いで、お話しを頂くことができませんでした。この場をお借りしてお詫び申し上げます。）

山崎先生は、昭和五十一年に本学に着任された後、演劇研究、人材育成のみならず、劇作家、評論家、また劇場や財団設立、各種委員会委員などの社会的活動においても、素晴らしいお仕事をされて来られました。このような山崎先生の今までのお仕事に感謝し、今回の文化勲章受章をお祝いできる機会を設けることができましたことを喜びたいと思います。今後は、この山崎先生のお仕事を受け継ぎ、これからの演劇研究、学問の発展、社会への貢献にわずかでも貢献することができれば、これ以上の欲びはありません。

プロフィール



永田靖（ながた やすし）
1957年生まれ。大阪大学大学院文学研究科教授。演劇学、近代演劇史。最近の編著共著などに『Modernization of Asian Theatres (2019)』、『Transnational Performance, Identity and Mobility in Asia (2018)』、『歌舞伎と革命ロシア』（森話社、2017）、『Adapting Chekhov The Text and its Mutations (2013)』他多数。大阪大学総合学術博物館長、IFTR国際演劇学会アジア演劇WG代表、日本演劇学会会長。

プロフィール



山崎正和（やまざき まさかず）
昭和9年生まれ。昭和51年大阪大学文学部美学科芸能史・演劇学講座に着任。戯曲に『世阿弥』、『実朝出帆』、『二十世紀』、『演劇理論に『演技する精神』、『藝術・変身・遊戯』、評論に『劇的な日本人』、『柔らかな個人主義の誕生』、『社交する人間 ホモ・ソシアビリス』など、様々な著作を多数刊行し、大きな影響を与えた。また新国立劇場運営財団理事、経済産業省参事、文科省中央教育審議会会長、サントリー文化財団理事などの各界で要職を務めた。平成11年に紫綬褒章受章、平成19年に文化功労者。



同窓生からのメッセージ

「マヤコフスキイの悲観、あるいは人文学への周回」

小田 研史

私はまだ厚顔……ではなくて、紅顔の書生然であった頃のことです。巷間では「一九九九年七月に世界が終わるらしい」と、まことしやかに語られておりました。ああ、そうなのか。四回生の夏に、この世界は終わってしまうのか。

よきチエキストに追われたマヤコフスキイのように悲観にくれた私は、ろくに単位も揃えられず（まあ、世界の終わりとは無関係にでしたが）。就職超氷河期といわれた時代の寵児よろしく、当て所もなく待兼山を逍遙する日々でした。

若きウエルテルみたいに懊悩した二十代前半でしたが、思わぬ縁から専門職の事務所をお手伝いすることになります。当初は学費の足しになれば、程度の軽い気持ちだったものの、気づけばフルタイムで仕事にいきしむことに。キャンパスに顔を出さないまま、個人事務所を法人化するところまでガツリとコミットしてしまいました。

そんなこんなで、しばらく学校にも戻れず、最後につかの間の学籍に復したところには、はや十年もの月日が経過。同期がすでに助教になっていたり、人も建物もすっかり様変わりして、まるで浦島某のようだったのを思い



小田 研史 (おだ きよふみ)
1996年 文学部 入学
2006年 同 卒業?
(演劇学専攻)
現 司法書士法人おおさか法
務事務所 専務執行役員

出します。

その後、無事に卒業できたかどうかは定かではないのですが、翌春から事務所に戻りました。現在では、大阪・兵庫・京都・東京の六拠点、スタッフ五十名ほどで専門サービスを提供しています。年々高まる資産の防衛や円滑な承継のニーズに対して、中立的な立場からの支援を行うことも増えました。

AIやシステムの高度化により、他の例にもれず土業も変容しつつあります。テクニカルな部分も依然として重要ではありますが、クライアントの抱える想いやその背景など、機微なことがらを酌む、いわゆる「文脈を読む」ということも同様に重視されるようになってきました。

その意味では、時代の流れが、ふたたび人文学のほうへと周りつつある……ということ、少し大げさでしょうか。人間が生み出すさまざまなものをテキストとして、そこから多様なコンテキストを読み解くような試みが、あらためて輝きを増してきているように思います。

「多様の時代を生きる」

津村 豊光

大学卒業後、ひよんなことから渡欧し結局十三年もの間海外生活を送った。ドイツでは再び大学生となり、卒業後は研究助手のアルバイトをしながら職を探す。運よく化学薬品メーカーに就職したものの、社の事業移管でフランスへ移住、その後帰国までの七年間を現地で過ごした。偶然とも思える様々な人との出会いの中で、多くの得難い経験をさせていただいたというのが正直な感想であるが、私にとっての海外生活とは、「多様な価値観」との遭遇の連続でもあった。国や文化、社会階層や職業

のおける様々な「価値観」を目の当たりにして、それらを理解しながら協調し、場合によっては回避して生きてゆくことは、忙しくも楽しい時間であったと今でも懐かしく思い出す。

よく当時経験した「ことばの壁」について尋ねられるのだが、これを克服するには「どう話すか」に囚われ過ぎないことだと答えている。意志を伝えるためには、存外最小限の修辭で事足りるものだ。それよりも「何を話すか」を考へること。社会に出ると何を自身の専門、そして強みとするかが問われる。通訳でも翻訳家でもない者にとって、言語はあくまでツールに過ぎないからだ。

近年、日本は「ものづくり」における国際的な地位を急速に失いつつある。「必要最小限の機能を安価に提供すること」が大部分の市場の要求である以上、日本の「高価で良いものづくり」が競争できる市場は限られてきた。他方、国内の「労働生産性向上」も進まない。現在日本の製造業に携わる者として、「世界標準の競争力」を得ることは喫緊の課題である。

多岐に渡る分野の「多様な価値観」に触れられる文学部での日常は、異文化交流の場でもある。私自身、多くの議論を経て得られた様々な考え方や気付きに助けられた機会も多かった。大学での日々を糧に、願わくは共に日本の未来の「ものづくり」を考へていただける方々が、ひとりでも多く活躍されることを、不肖の先輩ながらお祈りする。



津村 豊光 (つむら とよあき)
株式会社日本ラスパート代表
取締役社長
1999年3月日本学科卒業 (比較文化学)。卒業後渡欧、ドイツで2度目の大学生活を送る。専攻は金属表面処理工学。その後外資系化学メーカーに就職、ドイツ、フランスでの勤務を経て11年帰国。18年4月より現職。

◆「教育ゆめ基金」のご報告◆

いつでも、お心のままにご寄付いただければ幸いです

文学部創立60周年(平成20年)の折に創設しました「教育ゆめ基金」は、文学部・文学研究科の教育活動を支援していただくための基金です。この基金は、人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としています。2013年秋に大阪大学「未来基金」と窓口統合したことにより、いっそう多くの同窓生ならびに教職員の皆様より、2019年度総計44万円ほどのご寄付をいただきました。ご厚情に心よりお礼申し上げますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。(文学研究科長 福永 伸哉)

2019年1月～2019年12月「教育ゆめ基金」寄付者リスト(敬称略・五十音順)

南 徹弘	石原 実	中村 千草	鳥井千栄子	このほか、氏名掲載を希望されない方9名
深水香津子	安川 満	廣畑 香里	中西チヨキ	
渡辺 明英	加藤 信昭	佐々木ミツ	日野林俊彦	
中西 徹	浦崎なぎさ	若林 直樹		



◆「教育ゆめ基金」の支出(見込)(2019年4月～2020年3月)

- 文学部海外留学支援制度奨学金 720,000円(4名分) •文学研究科大学院生海外調査等助成 768,000円(13名分) 計 1,488,000円
- ※2019年度末残額(見込): 11,175,000円

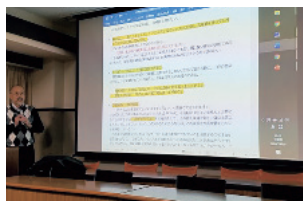
文学部・文学研究科では、多くの研究室がそれぞれ独自の同窓会活動を行っています。今回は、こうした活動のうち、哲学・思想文化学と文芸学のものをご紹介します。

アカデミズムの堅持

舟場 保之

哲学・思想文化学という名称は、現在は学部の専修名であり、大学院の専門分野としては哲学哲学史と現代思想文化学に分かれます。かつて、哲学哲学史という総称の下、第一講座(フランス哲学系)、第二講座(ドイツ哲学系)、倫理学(イギリス哲学系)に分かれていた時代には、第二講座主催で「カント・アーベント」という研究会が年に2度開催され、普段は見えない方たちが集まってきて、喧々諤々議論を交わすという、同窓会めいた活動がありました。言うまでもなく、参加する学部生や院生にとっては、それはまったく同窓会活動とはかけ離れた牧歌的ではない時間でした。その後、教養部解体、大学院重点化、法人化を経て、哲学哲学史専門分野および現代思想文化学専門分野のスタッフによって handai metaphysica という研究組織を創出し、当初は年に2度、現在は年に1度、研究例会を開き、研究室発行の『メタフシカ』の合評会を開催しています。2005年にはラジオ・メタフシカを開局、現在はビデオ・メタフシカとして、YouTubeにて、研究室での催しものをそのつど全世界規模で発信しています。また、2009年からは、毎年、ユネスコが定めた世界哲学の日(11月第3木曜日)を記念して、講演会を開いているほか、2010年からは、若手研究者ワークショップと称して、若手研究者を中心とした発表の機会を設けています。

『ニューズレター』第4号(2005年3月20日発行)では、〈研究室今昔〉として、哲学・思想文化学専修の記事を読むことができます。そこには、〈アカデミズムの堅持〉という研究室のモットーが繰り返し記されています。やればやるだけひどくなる改革の中で、アカデミズムを堅持することに不安が見えていたのかもしれない。なお続く改革のどさくさにまぎれて、自発的に隷従しようとする潮流に抗いつつ、アカデミズムを堅持してゆきたいと考えております。同窓のみなさまのお力添えを、どうぞよろしくお願い申し上げます。



唯一無二の文芸学研究室

上月 翔太

大阪大学文芸学研究室は文学の研究室でありながら、「芸術としての文学」を対象とする点で唯一無二の存在です。芸術学/芸術史講座の一つとして、美学、美術史学、音楽学、演劇学と並んで、文学芸術についての研究を進めています。

一言に「芸術としての文学」とは言ってもそのアプローチは多様です。その多様さは本研究室をこれまで導いてこられた先生方のキャリアからも明らかです。初代教授の當津武彦先生は古代ギリシア哲学、後継の森谷宇一先生は美学、木曾明子先生と内田次信先生は西洋古典学から、そして加藤浩先生はこれらの伝統を受け継いで、文芸とは何かという大問題に取り組みされてこられました。そうした中で、今日に至るまで本研究室のスタッフに共通しているのは、文芸を考えるうえで豊富な材料を提供してくれる、ギリシア語・ラテン語で著された西洋古典に絶えず立ち返ることです。そのため、本研究室は古典教育、研究を牽引する研究室の一つとなっています。

今現在(2019年)、研究室に所属する学生の関心は、西洋古典からロシア文学などの外国文学、あるいは日本の文芸思想など古今東西様々です。週に一度行われるゼミは学部2年次から必修ですが、少人数でありながら様々なテーマについて知見を得られる魅力的なものになっていると自負しております。近年の傾向として、1年次に西洋古典語を学んだ学生が、その文学に直に触れてみたいと本研究室を志望するケースが増えてきており、学生を惹きつける西洋古典の魅力はまだ見直されるべきだと感じています。

現在の文芸学研究室は渡辺浩司准教授、西井奨講師の二名の常勤スタッフが教育、研究の任にあたっています。また、学術雑誌『文芸学研究』『神話学研究』を発行し、研究の成果を公表することも行っています。人文学をめぐる状況が激動する中、西洋古典という伝統的な対象を扱いながらも、現代の芸術や社会にも資する仕事で、唯一無二の存在である文芸学研究室に課せられた使命であると考えています。今後とも同窓会の皆さまの厚いご支援を賜りますようお願い申し上げます。

退職される先生方からのメッセージ

(五十音順)

◆退職にあたって

荒川 正晴

大阪大学文学部（文学研究科）に赴任して二十四年、今年度をもって定年退職いたします。この間、大学院重点化や大阪外大との統合などがあり、組織としては大きな変化の波を被ってきました。さらに今現在、文学研究科という看板も降りつつあります。今年度で去る身としては、こうした変化が某かでも良い結果に結びついてくれることを願って止みません。

このような状況の中、幸いなことに専門分野単位の活動には、今までのところ大きな差し障りはなかったように思います。私が属す東洋史学という研究分野は、学部生であつてもテーマによっては、すぐに当該分野のオーソリテイになることができます。私も身をもってそれを体験してきました。加えて、ここ二十年来、新出の史料が続々と発見されており、その現状を掌握するだけでも大変に苦労する状態が続いています。ですので、研究しなければならぬことは山積しています。また、そうした研究を少しでもまとめれば新たな史実を着実に積み重ねられるとともに、それまでの研究を刷新することも可能です。ところが、私が阪大に赴任して以降、いわゆる「雑務」が急速に増大し、個人的にはまとまった研究時間を確保するのが大変に困難な時代となってきました。率直に申し上げて、当初予定していた研究計画の十分の一もできなかったというのが正直な感慨です。ただ、今世紀に入り高校世界史の履修問題と取り組む必要に迫られ、初年次生向けに教養科目の「市民のための世界史」を担当したことは、大変に楽しくもあり専門の研究にとっても有益でした。世界史を十五回で古代から近現代まで概説するというハードな内容でしたが、これが本当に講義をしていて楽しくて、研究者として専門論文を書くにあたって、とても有益な時間となりました。まさに、担当する度に何か新たな発見をしました。それだけ、これまで如何に自分が専門とする時代や地域に限定した蛸壺的な研究しかしてこなかったことを痛感いたします。

受講してくれた学生も、大方は新たな世界史の見方、考え方に賛同もしくは関心を寄せてくれました。ただ一つ気になっているのは、次第に学生たちの考え方が二者択一的な解答をすぐ求める傾向が強くなってきていることです。昨今の風潮として、社会全体が右傾化していると言われますが、私から見ると、思想的に「左」とか「右」とかの問題というよりも、単にものごとの捉え方が「幼

児化」しているに過ぎないだけなのですが、先の学生の動向は、こうした社会の風潮と軌を一にしていると感じます。人文学の研究や教育の真価を発揮するのは、まさにこれからだと思います。

◆退職するにあたって

加藤 正治

私と文学部・文学研究科との直接的なつながりは、大阪大学と大阪外国語大学の統合を目前に控えた頃にかかってきた一本の電話から始まる。英語学の大使教授からの電話で、その内容は、統合に際して大阪外国語大学から移籍して行く十二名の教員の最後の一人として移籍しないか、というお誘いであった。伝統ある文学部・文学研究科は私にとって眼前にそびえる大山にも等しく、そこに移籍することは大きな不安であった。あれこれ逡巡した挙句移籍することに決めたのであるが、以来十二年余り文学部・文学研究科を去る日がもうすぐやってくる。赴任当時至らない私を受け入れて下さった先生方はもとより、その後同僚となられた先生方に対しても私が申し上げることができるのは「感謝」という言葉をおいてほかにない。特に言語生論コースと英語学の先生方にはご迷惑のかけっぱなしで申し訳なく思っているし、様々な助力をいただいで大変感謝している。この場を借りて厚くお礼申し上げる。

振り返ってみると、優秀な学生諸君に囲まれて大変恵まれた十二年余りであった。授業中に自分が話す事柄の内容を理解してもらえ、理解が難しければ的確な質問が返ってくる。そしてしばしの間デイスカッションがある。教員が幸せを感じる瞬間はいくつもあると思うが、これは間違いないような幸せな瞬間の一つである。教員生活の最晩年に文学部・文学研究科においてそのような幸せを味わうことができたことは望外の喜びである。

ノブレス・オブリージュ (noblesse oblige) という言葉がある。貴族など高い身分の者にはそれ相応の重い責任・義務があるといった意味であるが、昔それに引っかけ短気スピーチをしたことがある。新人生歓迎会の時に急遽頼まれたスピーチだったと記憶しているが、「文学部・文学研究科において高度な学識を身に着けることになる皆さんにはそれに応じて果たさなければならぬ大きな社会的責任と義務がある」といったようなことを述べた。ずいぶん偉そうなことを言ったものであるが、今回退職するにあたり、「身に着けることになる」を「身に着けた」に置き換えて皆様、特にこの度卒業・修了される皆様に対して今一度偉そうなことを言うことをお許し願いたい。皆様が文学部・文学研究科の卒業生・修了生としての自信と誇りをもって人生を歩まれんことを心より祈念して、退職の挨拶としたい。



略歴
1955年、東京都生まれ。1986年、早稲田大学文学研究科東洋史学専攻博士課程、単位取得退学。早稲田大学副手などを経て、1996年大阪大学文学部に着任。2008年、博士（文学、大阪大学）の学位取得。著書に、「オアシス国家とキャラヴァン交易」（山川出版社、2003年）、「ユーラシアの交通・交易と唐帝国」（名古屋大学出版会、2010年）、「中央ユーラシア史研究入門」（山川出版社、2018年）など。



略歴
1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了（英語学講座）。文学修士（名古屋大学、1979）。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。論文に「『カンタベリー物語』にみられる否定詞neについて」『英米研究』第36号（2012）、「If = thoughである可能性」『待兼山論叢』第49号（2015）など。

◆この三年間の通勤読書

村田 路人

一九九六年春の着任以来、長らく日本史講座の教員として教育・研究に携わってきましたが、いよいよ阪大を去る時が近づいてきました。退職にあたっては、当然のことながら自分の研究室にあるものをすっかり整理して出いかねばなりません。ところが、私の部屋は、二四年の間に溜まったモノで溢れかえっています。着任後しばらくは自室で大学院ゼミをしていたのですが、いつしか学生が来ても一人座るのがやっとという状態になってしまいました。

三年余り前、これではいけないと思い、三年計画で部屋を片付けることにしました。まず、専門書を中心とする膨大な数の私物の書籍を、大学に出ている日は必ず三冊自宅に持ち帰ることにしました。ただし、単に家に運ぶだけではもったいないので、帰りの電車の中で、その三冊の全頁にともかく目を通すことにしました。私が利用している鉄道は阪急と地下鉄で、電車に乗っている時間は合計三十分です。三冊を読むには、石橋駅で乗車したあと十三駅に着く頃には、最初の一冊を読み終えていなければならぬ計算になります。

もちろん、三十分間で三冊の内容をしっかりと頭に入れるなど無理な話ですが、著書の体系的なことは意外につかめることに気づきました。また、著者の研究の軌跡や、研究上の人間関係などが語られていることが多い「あとがき」を読んで、なぜこの著者がこのような論を立てていたのかという疑問が氷塊したことも、何度かあります。いずれも部分的には読んでいる本ですが、その時は気づかなかったことが、かえってこのきわめて短い時間の読書のおかげで気づくことができたのです。

こうして、この三年間、帰路のカバンは重くて辛い反面、電車の中の三十分間は、私にとつて至福の時間となりました。今日はどのような発見があるのかなと、毎回期待しながら石橋駅で乗車しています。

さて、毎回三冊の本を持って帰ることを三年も続けられれば、大分部屋も片付くはずですが、この原稿を書いている現在（一月上旬）も、相変わらずモノだらけです。まだ本はたくさん残っていますし、大量の書類はほとんど手つかずのままです。このニューズレターが出る頃には、さすがに空にしておかねばならないのですが、果たしてどうなっているでしょうか。飽和状態になりつつある自宅の方も心配です。



略歴
1955年生まれ。大阪大学文学部卒。同大学院文学研究科博士後期課程中退。大阪大学助手、京都橘女子大学専任講師、同助教授を経て1996年大阪大学文学部助教授。2002年教授。著書に『近世広域支配の研究』（大阪大学出版会、1995年）、『近世畿内近国支配論』（塙書房、2019年）など。

◆教師として、研究者として

和田 章男

定年後がなかなかイメージできない。文学部・文学研究科に着任して二十七年、その前に助手一年、言文でフランス語教師として六年、大学院時代を合わせると四十年以上阪大で過ごした。三年半にわたるフランス留学期間を別にすると阪大から離れたことがない。優秀な学生たち、各学界をリードする同僚たち、有能で親切な事務職員の方々、この上なく素晴らしい環境のなかで過ごした現役時代の生活のリズムがすっかり身にしみついている。

思い起こせば、大学院に進学したころは、特に研究者をめざしていたわけでもなければ、ましてや大学教師になろうと思っていたわけでもなかった。ただもう少し勉強をしたかっただけだった。修論、給費留学生試験、博論など目の前にある課題に取り組んでいるうちに、いつの間にか研究者のキャリアを歩んでいた。本当の意味で研究の面白さを知ったのは留学時代だった。ブルースト草稿研究という当時最も盛んだった研究に挑戦したことで、おのずと実証研究の方法を学ぶことになった。研究を続けるなら大学教師の道しかない。

それにしても母校にずっと勤められたのだから、幸運だったと言ってしまう。しかしながら、助教授として文学部で講義をすることはかなりのプレッシャーだった。かなり早くから講義の準備を始める。それは昨今でも変わらない。研究と教育はやはり表裏一体の関係にある。研究したことを講義の題材にするのは当然であるが、学生の多様な関心に応えるためにも、専門的に研究しているテーマばかりを扱うわけにはいかない。徐々に様々な作家・作品を授業で扱うようになった。文学史の概説も、毎年違ったテキストを使う演習も、自分自身の糧となった。専門とするブルースト研究においても、他の作家との関係、さらには絵画や音楽などのジャンルとの関係など、ブルーストに視点を置きながらも、少しは広い視野を持てるようになった。節目となる現役最後の年には、日仏の研究仲間を招いて国際シンポジウムを開催するとともに、文学・絵画・音楽におけるブルーストの受容と創造をテーマとする著書を阪大出版会から刊行することになった（二〇二〇年六月出版予定）ことは現役時代の総決算となった。

研究者に「定年」はないという。定年後のほうが研究に専念できるかもしれない。しかし、阪大文学部・文学研究科の教員であることが、どれほど研究の糧となったか測り知れない。



1954年京都市生まれ。大阪外国語大学卒、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。パリ・ソルボンヌ大学第三課程文学博士。大阪大学文学部助手、言語文化部講師・助教授を経て、1993年大阪大学文学部・文学研究科に着任。著書にLa création romanesque de Proust : la genèse de «Combray» (Champion)、『フランス表象文化史—美のモニュメント』（大阪大学出版会）、『ブルースト受容と創造』（大阪大学出版会）など。

お知らせ

◇『文学部・文学研究科 卒業生・修了生名簿』(二〇一七年版)について
 二〇一七年三月刊行の『大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿』ご購入を随時承っております。頒価(五千四百円・送料込)でお送りいたします。ただし名簿のご購入は同窓会会員の方に限定しておりますので、ご入会がお済みでない同窓生の方には入会手続きをお願いしております。あらかじめご了承ください。なお、新規に同窓会終身会費(一万円)をお支払いいただいた方のうち、希望される方に一冊呈呈しております。振込用紙通信欄に名簿希望の旨をお書き添え下さい。
 ご購入希望の場合は以下の郵便振替口座に所定の金額をお振込み下さい。ご購入金確認後、発送させていただきます。ご購入に際しご質問等ございましたら同窓会事務局まで遠慮なくお問い合わせ下さい。

◇同窓会へのご寄付について
 同窓会では、寄付金(一口二千円)を受け付けております。昨年度・今年度と、たくさんの方にご支援を賜りました。五頁にご寄付をいただいた皆様の御芳名を記載しております。誠にありがとうございました。引き続きご支援をお願い申し上げます。

「名簿購入代金・終身会費のお支払い、ご寄付の受付」

口座番号 009401179043
 加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

*お手数ですが、通信欄に①卒業修了年、②専攻専修名をご記入下さい。

お願い

◆住所変更について
 住所変更・勤務先変更等ございましたら、必ず同窓会事務局までご一報下さい。名簿への住所、電話番号等の記載拒否を希望される場合は、その旨あわせてお知らせ下さい。皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

大阪大学文学部・文学研究科同窓会

- ◆会長 長 柏木 隆雄 (S四四卒) 村田 路人 (S五二卒)
- ◆副会長 長 玉井 暉 (S四四卒) 澤田 有紀 (S六〇卒)
- ◆総務部長 服部 典之 (S五六卒)
- ◆事務局長 舟場 保之 (S六一卒)
- ◆企画部長 高木 千恵 (H一〇卒)
- ◆広報部長 西田有利子 (H六卒) 田中 英理 (H一〇卒)
- ◆庶務部長 田口宏二朗 (H一〇卒) 中尾 薫 (H一五修)
- ◆事務局補佐 米田 理生 (H一〇卒)

住所: 〒560-0852 豊中市待兼山町一番五号
 ホームページアドレス: <http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>
 事務局メールアドレス: dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

第11回大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座のご案内

2020年5月10日(日) 13時30分～15時30分
 「キャラクターで読み解く村上春樹」

●村上春樹の小説は、日本語のスピーチ・スタイルのさまざまなヴァリエーションを利用して、登場する人物を生き活きと際立たせています。講師が2000年以来研究してきた「役割語」の理論を援用し、村上春樹の小説のいくつかについて分析した結果をお話いたします。関連して、村上春樹作品を外国語に翻訳した例も併せて検討していきます。

※会場: 大阪大学中之島センター9F 会議室1・2

※講師: 金水 敏 教授
 (大阪大学大学院文学研究科・国語学専門分野)

※参加費: 無料

●お申し込み方法

大阪大学文学部・文学研究科同窓会のサイト (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>) または、氏名・卒業(修了)年次・専攻・参加人数・連絡先を明記の上、メール又はハガキで下記連絡先までお申し込みください。

※応募締切は、2020年4月30日(木)です。

※応募多数の場合は先着順とさせていただきます(定員40名)。

メール: dousoukai@let.osaka-u.ac.jp

住所: 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

大阪大学文学部・文学研究科同窓会 宛

第10回 大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座報告

5月12日(日)、「阪大東洋学の最前線」と題する講演会が開催されました。

松井太先生(本学教授)による「モンゴル時代シルクロードの仏教巡礼」、および堂山英次郎先生(本学教授)による「閻魔大王の原像を求めて」とそれぞれ題した講演が行われました。中央アジアの宗教遺跡に残された落書きからみえる多民族の交易・巡礼ルートを再現する松井先生、日本でも馴染みの深い閻魔イメージの内実・変遷をインド・ペルシアの諸文献から説き起こす堂山先生、いずれも充実した内容と白熱した質疑が満載の午後でした(散会後もネパール料理店にて深更まで議論が続きました)。

